２０２０／１２／０６　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　副牧師

主　　題：正しい審判者
聖書箇所：詩篇　７篇

テーマ　：　正しい審判者の持つ特徴とは？

詩篇７篇：　ベニヤミン人クシュのことについてダビデが主に歌ったシガヨンの歌
7:1 私の神、【主】よ。私はあなたのもとに身を避けました。どうか、追い迫るすべての者から私を救ってください。私を救い出してください。
7:2 救い出す者がいない間に彼らが獅子のように、私のたましいを引き裂き、さらって行くことがないように。
7:3 私の神、【主】よ。もし私がこのことをしたのなら、もし私の手に不正があるのなら、
7:4 もし私が親しい友に悪い仕打ちをしたのなら、また、私に敵対する者から、ゆえなく奪ったのなら、
7:5 敵に私を追わせ、追いつかせ、私のいのちを地に踏みにじらせてください。私のたましいをちりの中にとどまらせてください。　セラ
7:6 【主】よ。御怒りをもって立ち上がってください。私の敵の激しい怒りに向かって立ち、私のために目をさましてください。あなたはさばきを定められました。
7:7 国民のつどいをあなたの回りに集め、その上の高いみくらにお帰りください。
7:8 【主】は諸国の民をさばかれる。【主】よ。私の義と、私にある誠実とにしたがって、私を弁護してください。
7:9 どうか、悪者の悪があとを絶ち、あなたが正しい者を堅く立てられますように。正しい神は、心と思いを調べられます。
7:10 私の盾は神にあり、神は心の直ぐな人を救われる。
7:11 神は正しい審判者、日々、怒る神。
7:12 悔い改めない者には剣をとぎ、弓を張って、ねらいを定め、
7:13 その者に向かって、死の武器を構え、矢を燃える矢とされる。
7:14 見よ。彼は悪意を宿し、害毒をはらみ、偽りを生む。
7:15 彼は穴を掘って、それを深くし、おのれの作った穴に落ち込む。
7:16 その害毒は、おのれのかしらに戻り、その暴虐は、おのれの脳天に下る。
7:17 その義にふさわしく、【主】を、私はほめたたえよう。いと高き方、【主】の御名をほめ歌おう。

今日の内容を見る前に先週の内容を思い出してください。自分の犯した罪が原因で主の懲らしめを受け、非常に大きな苦しみを味わっているダビデの姿を見ました。主の懲らしめによって彼のからだは深刻な病に蝕まれ余りの痛さで彼の心も弱り切っていました。そこから起き上がることもできず、余りの辛さで嘆き悲しみ、肉体も精神も衰え果てた彼の身には死がまじかに迫っていたのです。しかし、そんな苦痛の中、彼は涙ながらに主に祈りをささげていました。「確かに、自分は愚かで主の懲らしめに値するような罪深い者です。でも、主はこんな私さえもあわれみ恵みによって助けてくださる。」と、このようにしてダビデは主に信頼し期待していたのです。だからこそ、彼の心には主への確信、主の慰めが与えられていました。

同じように、私たちが日々の生活の中で罪を犯し主の懲らしめを経験するときに、私たちもこのダビデと同じような祈りをささげることができると言いました。たとえ、大きな悲しみ痛みを覚えることがあったとしても、主の訓練を通して私たちは神の愛を学ぶことができ、より強い者へと変わっていくことができる、神の子どもとされた私たちは主の懲らしめの中でも希望をもって歩んでいくことができると、そのように詩篇６篇から学ぶことができました。

さて、今日見ていく７篇、ここでもまたダビデは苦しみの中に置かれていました。しかし、前回見た自分の罪によって苦しみに遭っていたダビデと異なり、ここでのダビデは無実の罪によって敵から訴えられ迫害を受けていたのです。彼は有りもしない罪を責められ、本来、受ける必要のない苦痛を味わっていました。内容を見る前に、いったい彼の置かれていた状況がどのようなものだったのか、その歴史的背景を見ます。先に見た３篇と同じように《７篇》の下には**「ベニヤミン人クシュのことについてダビデが主に歌ったシガヨンの歌」**という表題が記されています。以前に見たように、この表題は私たちにその歴史的背景を教えています。

ただ残念ながら、この**「ベニヤミン人クシュ」**という人物はこの７篇にしか出て来ていないために、だれのことを指しているのか具体的にはだれにも分かっていません。しかし、私たちが歴史を振り返ってみると、ダビデとベニヤミン一族の間には大きなわだかまりがあったことを見て取ることができます。

思い出してください。ダビデのことを妬み彼を何度も殺そうとしたあのサウル王はベニヤミン一族の者でした。そして、そのサウル王がペリシテ人によって打たれ、その後、彼に代わってイスラエルの王になったのがこのダビデだったのです。想像できますね。自分の一族に代わって王になったダビデ。ベニヤミン一族の者はダビデが王になったことを快く思っていませんでした。だからこそ、サウルの家とダビデの家には戦いが起こっていたりしました。

Ⅱサムエル３：１には**「サウルの家とダビデの家との間には、長く戦いが続いた。ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。」**と書かれています。また、詩篇３篇でも見ましたが、自分の息子アブシャロムの反乱によってエルサレムから脱出し荒野に逃げていた時、そのダビデのもとにやって来て彼をのろった人物もベニヤミン一族のものでした。Ⅱサムエル１６：５－８の中にこのように書かれています。**「:5 ダビデ王がバフリムまで来ると、ちょうど、サウルの家の一族のひとりが、そこから出て来た。その名はシムイといってゲラの子で、盛んにのろいのことばを吐きながら出て来た。:6 そしてダビデとダビデ王のすべての家来たちに向かって石を投げつけた。民と勇士たちはみな、王の右左にいた。:7 シムイはのろってこう言った。「出て行け、出て行け。血まみれの男、よこしまな者。:8 【主】がサウルの家のすべての血をおまえに報いたのだ。サウルに代わって王となったおまえに。【主】はおまえの息子アブシャロムの手に王位を渡した。今、おまえはわざわいに会うのだ。おまえは血まみれの男だから。」**。

ですから、７篇の表題にある**「ベニヤミン人クシュ」**がだれかが分からなかったとしても、少なくとも、私たちが見ることができるのは、ダビデとベニヤミン一族の間には大きな争いがあったということ、ベニヤミン一族によってダビデは苦しめられていたその様子を思い浮かべることができるのです。彼は彼のことを憎むベニヤミン一族の者から有りもしない無実の罪によって不当に訴えられていたのです。そのような苦しみの中でダビデはこの詩篇７篇を歌うのです。

私たちも普段の生活でときに周りの人から不当に扱われ有りもしないことで責められることがあります。学校や職場で、自分は何も悪いことをしていないにも関わらず、自分の過ちだと勝手に決め付けられて怒鳴られたり罰を与えられるようなことを皆さんは今までに経験されたことがあるかもしれません。またある時は、私たちがもっているキリストへの信仰ゆえに、嫌がらせを受けたり、直接暴力を受けることはなかったとしても、ことばによって精神的に迫害を受けた経験があるかもしれません。

また、皆さん、こんな経験をしたことはないでしょうか？自分に対する不当な扱い、有りもしない疑いに対して反論すればするほど、相手はそれを捻じ伏せようとして怒り狂って来ること。また逆に、怒ることが嫌だから無視しておこうと穏やかに済ませようとすれば、相手はさらに責め立てて来ること。自分は何も間違ったことをしていないのに、どうしてこんなに咎められるのだろう、無実の罪で非難されるのだろう、反論することも黙っていることも許されない、こんな状況にあって自分はどうすればいいのだろうと…。もし、皆さんの中でこのような経験をされたことがあるなら、また、これからそのような経験をするのなら、今日見る詩篇７篇は私たちにその苦しみからの助けを教えてくれています。無実の罪で訴えられていたダビデは、そのような状況の中でひとつの希望を持っていました。それは「正しい審判者である神に問題のすべてをゆだねること」でした。

彼は自分の問題を解決しようとするのではなく、正しい判決をしてくれる正しい審判者のもとに自分の抱えている問題のすべてを持っていったのです。では、ダビデが拠り頼んだ正しい審判者とはいったいどのようなお方なのでしょうか？この７篇には正しい審判者に関して四つの特徴が挙げられています。ですから、このみことばを通して私たちが信じている神がどのようなお方かを皆さんとともにもう一度考えたいと思います。私たちは今日どのようなお方に信頼して歩むことができるのか？そのことをダビデを通して考えていきましょう。

☆正しい審判者の四つの特徴

１．守りを与える正しい審判者　　１－２節

１－２節**「:1 私の神、【主】よ。私はあなたのもとに身を避けました。どうか、追い迫るすべての者から私を救ってください。私を救い出してください。:2 救い出す者がいない間に彼らが獅子のように、私のたましいを引き裂き、さらって行くことがないように。」**、追い迫る数多くの敵の迫害からの助けをダビデは何よりも主に求めていました。彼はまずこう言いました。**「私の神、【主】よ。私はあなたのもとに身を避けました。」**と。私たちはこれまで詩篇から見て来たように、たとえどんな困難な状況に置かれたとしても、どんな苦しい状況に置かれることがあったとしても、私たちにとっての守りはこの主のうちにしかありません。主のうちに身を避けることこそがどんな苦しみからも自分自身を守り平安をもたらすことができるのです。そして、もっと言えば、主のうちに身を避ける生き方こそが幸いな人の生き方でした。思い出してください。詩篇２：１２の最後に**「…幸いなことよ。すべて主に身を避ける人は。」**とありました。

ダビデはこの真理がよく分かっていました。だからこそダビデは他のどんなものに目を向けることよりも、たったひとつ自分に完璧な守りを完璧な助けを与えることのできる神を見上げたのです。そして、

「私を救ってください。私を救い出してください。」と彼は訴えたのです。彼が求める祈り、助けを求める声は非常に切迫したものでもありました。彼はここで自分の身に降り掛かっている苦しみがいかに大きいのか、そのことを**「彼らが獅子のように、私のたましいを引き裂き、さらって行くことがないように。」**と表現しています。

皆さんもご存じの通り、羊飼いであったダビデ、彼にとってこの獅子という存在が羊にとって、そして、羊を守る自分にとってどれほど危険なものかをだれよりも分かっていたでしょう。だからこそ、彼は他の詩篇でも死の危険に遭遇していることを表現するのにこの「獅子」ということばを用いたりしています。たとえば、詩篇５７：４**「私は、獅子の中にいます。私は、人の子らをむさぼり食う者の中で横になっています。彼らの歯は、槍と矢、彼らの舌は鋭い剣です。」**、彼は無実の罪で自分を責める敵の攻撃が余りにも激しく、自分のたましいが引き裂かれてしまう、自分のいのちが取られてしまうと、そのような切迫した状況に置かれていることを訴えるのです。敵の迫害に対して余りにも無力であること、このままでは粉々にされてしまうこと、そのことを訴えます。

そして、「私の周りには何も助けるものがありません、ただ神さま、あなただけがこの危険から私を救い出してくださるお方です。」とそのように彼は訴えたのです。ダビデは人間的なものを頼りにするのではなく、彼に必要な守りを与えることのできる正しい審判者に助けを求めました。

私たちも同じです。もし、人に責められることがあってその苦しみを経験するとき、私たちがその解決を自分自身のうちに見出そうとするのであれば、神以外のものに見出そうとするのであれば、それは多くの場合失敗します。自分を非難する声に圧倒されて心から喜びや平安を失ってしまうことがあったり、自分が傷つきたくないという思いから、自分を責める人たちに過剰に反応してしまうこともあります。たとえば、自分を訴える者を憎んだり、表立っては言えないからと陰でその人のことを悪く言ったり、噂話をすることによってその人に仕返しをしようと、そんなことをしてしまうこともあります。

私たちが唯一の守りである神以外に目を向けるのであれば、このようなことに陥ることがあります。だからこそ、私たちがまず覚えておくべきことは、私たちの守りは正しい審判者である神のうちにのみあるということです。私たちの力にも私たちの知恵にも、私たちのうちにはそのような困難や迫害を耐え忍ぶ力はありません。しかし、私たちが主にすべての問題をゆだね信頼するのであれば、正しい審判者であるこのお方は私たちの心に守りを与えてくださるのです。ダビデはこのように歩むことができました。私たちも同じように今日を歩むことができるのです。

２．心を調べる正しい審判者　　３－９節

ダビデは正しい審判者である神が自分に守りを与えてくださるだけでなく、この方は人の心を見られそのうちにあるものを調べられるそのようなお方だと知っていました。９節の終わりにもこのように明白に記されています。**「正しい神は、心と思いを調べられます。」**と。だからこそ、心を探ってくださる神、主にダビデはこのように訴えるのです。「心のうちを探られる主よ、私の心のうちを今見てください。今、敵が私のことを責めていますが、あなたが私の心をご覧になれば、彼らが指摘しているような罪は私のうちにないことをあなたが証明してくださるでしょう。ですから今、無実の罪で苦しんでいる私をどうか助けてください。」と。

ダビデは３－４節に「もし」ということばを３回使っています。**「:3 もし私がこのことをしたのなら、もし私の手に不正があるのなら、」、「:4 もし私が親しい友に悪い仕打ちをしたのなら、また、私に敵対する者から、ゆえなく奪ったのなら、」**と、このように「もし」を繰り返して使うことで、自分は潔白であること、自分には責められる罪などは一切ないということを強調したのです。彼は自分は無実だと信じていました。自分が不正を犯していないこと、友人に対して誤った仕打ちをしていないこと、そのことを彼は確信していたのです。

彼は自分自身が神と人の前を正しく歩んでいると、そのような自信をもっていました。だからこそ、彼はこう言います。５節**「敵に私を追わせ、追いつかせ、私のいのちを地に踏みにじらせてください。私のたましいをちりの中にとどまらせてください。　セラ」**と。自分の無実を確信していたダビデはここまで言って、もし、自分のうちに少しでも過ちがあるなら、少しでも責められる部分があるなら、自ら進んで罰を受け入れますと、そのことを主に申し入れたのです。彼は**「私のたましいをちりの中にとどまらせてください。」**と言っています。この**「たましい」**ということばは「いのち」という意味だけでなく、「栄光、誉れ」と訳せることばが使われています。つまり、彼はここでもし自分に過ちがあるなら敵が自分のいのちを踏みにじり死ぬことになったとしても、また、彼がもっていた名誉、王としての栄光を粉々に砕かれ灰になったとしても構わないと、そのように言うのです。

皆さん、少し驚きではありませんか？もし、自分が間違っていたとして「自分のいのちを差し出します」と果たしてこのような告白を私たちはすることができるでしょうか？ダビデは自分が無実であることを信じていましたが、それは自分には全く罪がない完璧な者だと言っているのではありません。聖書

は明白にすべての人が罪をもっていることを教えています。ローマ３：１０には**「義人はいない。ひとりもいない。」**とあります。また、Ｉヨハネ１：８にも**「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。」**とあります。もちろん、ダビデも例外ではありませんでした。彼も私たちと何ら変わらない罪人だったのです。それなら、彼がここで「自分は無実だ」と訴えていたということはいったいどのような意味を表していたのでしょう？ただの傲慢だったのでしょうか？もちろん、そうではなかったのです。

彼がここで言わんとしたことは、今、彼の敵が自分を責めているというその特定の罪について自分は無実だと考えていたということです。彼は自分を迫害する者が取り上げる特定の訴えについて、「それは自分には当てはまらない。そんな不当なことを私は犯していない。」とその無実さを彼は確信していたのです。そして、ダビデは正しい審判者である神が今自分に起こっている理不尽な苦しみを省みて、正しい応答をしてくださるようにと求めていたのです。

６節**「:6【主】よ。御怒りをもって立ち上がってください。私の敵の激しい怒りに向かって立ち、私のために目をさましてください。あなたはさばきを定められました。」**と、ここでダビデは**「立ち上がってください。」「目をさましてください。」**と言っています。もちろん、これは神が座って休んでいるから横になっているからこのように言っているのではありません。これらのことばは「今すぐに！すぐに行動を起こしてください！」という緊急性を強調して使ったのです。今すぐに、責められている私に対して正しい報いをしてください、行動を起こしてくださいと、そのように彼は願ったのです。激しい迫害に苦しんでいたダビデは限界に達していました。だから、今すぐに、主がその御怒りで無実な自分を助け、そして、苦しめる敵をさばいてくださいと願ったのです。

そして、彼は続けてこのように言います。７－８ａ節**「:7国民のつどいをあなたの回りに集め、その上の高いみくらにお帰りください。【主】は諸国の民をさばかれる。」**と。ダビデは同じ詩篇９：４で**「あなたが私の正しい訴えを支持し、義の審判者として王座に着かれるからです。」**と言っています。ダビデは主が天の王座からさばきを行われる方であることをよく分かっていました。この正しい審判者は必ず罪をさばかれるお方だ。正しい者に正しい報いを与え、その者の足を堅く立たせてくださる、そのようなお方だとダビデは信頼していました。

そして、この信頼の土台にあったもの、主の働きを期待するダビデが持っていた根拠は「自分の義と誠実さ」でした。そのように書かれています。８ｂ―９節**「【主】よ。私の義と、私にある誠実とにしたがって、私を弁護してください。:9 どうか、悪者の悪があとを絶ち、あなたが正しい者を堅く立てられますように。正しい神は、心と思いを調べられます。」」**と。心を調べる正しい審判者は自分の正しさに報いてくださると、そのように強い確信を彼は持っていたのです。

少し考えてみてください。私たちはこのダビデのように自分の無実さを主の前に言い表すことができるでしょうか？箴言１５：３はこのように言います。**「【主】の御目はどこにでもあり、悪人と善人とを見張っている。」**と。私たちの心を隅々までご存じである主に対して、自分の正しさによって報いてくださいとこのように言うことができるでしょうか？もっと言えば、私たちは自分たちが信じているこの神が心を調べる審判者であることを覚えて、それにふさわしい歩みを今しているでしょうか？私たちは主が全知であることを知っています。私たちの主はいつも私たちの心を見ておられるということも知っています。どんなときもすべてのことを見ておられる、実際に口にすることも心の中のつぶやきさえも主は聞かれていると、そのことを知っています。主を騙すことなど私たちにはできません。

それなら皆さん、どうでしょう？私たちのうちにこの神に絶対に受け入れられない習慣や思いや考えなどはないでしょうか？もし、だれかが見ていたなら、聞いていたなら、自分は絶対にそんなことはしないと、そのようなことを隠れて行なってはいないでしょうか？皆さん、私たちはよく「心を吟味してください」と言います。しかし、私たちが行っている吟味は果たして私たちの心をすべてご存じの神の目を覚えて行なっているものでしょうか？それとも、私たちの見たいものを見、見たくないものを見ないという、そのような心の吟味でしょうか？私たちが主の求める吟味をしないなら、私たちは自分の基準で「大したことはない」とする小さな罪が時を経て心の中で大きくなり、そして、あなたのことを滅ぼし尽くしてしまうことがあるのです。あなたの心から喜び、平安、慰めを奪い去られることがあるのです。

皆さん、このような経験があるかもしれません。初めはほんの小さな出来事でいいのです。ほんの小さな気持ちの変化が心のうちに起こるのです。それはちょっとした罪かもしれません。ちょっとした嘘かも、ちょっとした妬みかもしれません。ちょっとした欲、苦い思いかもしれません。そのようなものが最初は小さいものであるにも関わらず、それらに向き合わないで放置するなら、結果、それによって自分の心が支配され自分の身に大きな問題として降りかかって来ることがあるのです。皆さん、よく覚えておいてください。私たちから喜びや平安、希望を奪うのにサタンは確かにときに大きな苦しみを用

います。しかし、多くの場合、サタンは一見大したことがないと見える小さな棘を皆さんの中に植え付けるのです。そして気付けば、その小さな棘が皆さんの中に大きな穴を開けるという、そのようなことを私たちは経験するのです。

ジェレミー・タイラーという人はこのように言っています。「罪は最初は人を驚かせるが、次第に楽しみになり、問題を感じなくなり、己の喜びとなる。たびたびのものが、頻繁のものになり、習慣となり、その人の生き方になるのだ。そして、人が罪悪感を感じなくなり、罪がしみのように心にこびりつき、決して悔い改めをしないと心を頑なにするとき、永遠の罰を受けるのだ。」と。皆さん、もし、私たちが人に責められることがあったとき、まず、自分のうちに罪がないかを主が見ておられるように吟味することです。もし、自分のうちに罪があってその罪を周りの人から責められているのなら、「自分は正しい」と訴えることは大きな問題、大きな間違いです。悔い改めて赦しを求めて、その訴えに親身に耳を傾けることです。

しかし、もし、自分の心をしっかり吟味した上でなおいわれもないことで責められることがあれば、私たちは人の心を調べ正しい者に必ず報いてくださる審判者にゆだねることができます。あなたの苦しみや痛みをあなた以上に分かってくださる神が、あなたの心の隅々まで知っておられる神、正しい審判者があなたの置かれている状況を顧みて、そして、抱えている問題を正しく扱ってくださるのです。ダビデはこの正しい審判者に信頼を置いて歩みました。でも、私たちはどうでしょう？主を覚えて主にふさわしい振る舞いをしているでしょうか？

３．公正なさばきを行う正しい審判者　　１０－１６節

１０節**「私の盾は神にあり、神は心の直ぐな人を救われる。」**、ここでダビデは再び自分の信じる神が自分にとって「盾」であること、そして、心の直ぐな正しい者を救ってくださるお方であることを思い返しています。激しい迫害によって苦しみ、様々なことばの攻撃を受けていた彼にとって、主はどんな攻撃も通すことのない堅固な守りでした。このような守りのうちにあってダビデは平安を慰めをもっていたのです。しかし、ダビデにとって主は盾であるだけではありませんでした。正しい審判者は同時に、悔い改めない神に逆らう者に罰を与えるような剣でもあったのです。

１１－１３節を見てください。**「:11 神は正しい審判者、日々、怒る神。:12 悔い改めない者には剣をとぎ、弓を張って、ねらいを定め、:13 その者に向かって、死の武器を構え、矢を燃える矢とされる。」**とあります。ここでダビデは正しい審判者は**「日々、怒る神」**であると言っています。だから、少し考えてみてください。もし、私たちの周りでだれかが酷い犯罪を犯して捕まったとします。その者が法廷に連れ出されたのに裁判官がその罪を意図的に見逃がすことがあったなら、私たちはこの裁判官に何と言うでしょう？「間違いです。罪を正しく裁いてください。」と言います。本当に優秀で本当に誠実で正しい裁判官は罪をそのまま見過ごすことは決してしないのです。法に基づいてその罪にふさわしい正しい裁きを行います。

同じように、私たちの義なる神はいつも罪に対して怒りを燃やしておられます。神に逆らって歩む者にはその行いにふさわしい罰を与えられるのです。だからもし、この中に自分の罪を悔い改めることをしないで、神に従うよりも自分の望むままに生きている人がいるなら、その人に待っているのは主の怒りとさばきだということを覚えておかなければいけません。主は今まさにそのような者に向かって燃える矢を射ようとその準備をしているのです。正しい審判者である主は必ず罪をそのままにして置くことはありません。だからこそ、今まだ罪の赦しを与えられている間にこのすばらしいイエス・キリストにある福音を自分のこととして受け取ってください。

Ⅱペテロ３：９には**「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」**と書かれています。怒りの神は今同時に、ひとりでも多くの者が滅びることなく救いへと導かれることを望んで、忍耐深く私たちに接してくれています。あなたがどれ程酷い罪を犯していたとしても、イエス・キリストにあるその愛はそれよりも遥かに優ったものです。この罪の赦しはイエス・キリストのうちにのみあります。だから、この主イエス・キリストを自分の救い主として信じ、そして、この方のために今日から歩みを始めてください。

しかしもし、あなたが今ここでこのように神が怒りの神であられることを聞きそのことを知りながら、なお、罪を悔い改めることなく犯し続けるなら、ダビデはそのように主に逆らい続ける者が迎える結末を１４－１６節に記しています。**「:14 見よ。彼は悪意を宿し、害毒をはらみ、偽りを生む。:15 彼は穴を掘って、それを深くし、おのれの作った穴に落ち込む。:16 その害毒は、おのれのかしらに戻り、その暴虐は、おのれの脳天に下る。」**、ここで言われていることは、自分のした悪は必ず自分に帰って来るということです。同じことが箴言２６：２７にこのように書かれています。**「穴を掘る者は、自分がその穴に陥り、石をころがす者は、自分の上にそれをころがす。」**と。ダビデの敵は無実の罪で彼を責め、様々な策略を立てて彼を

苦しめ貶めようとしていました。しかし、主により頼んでいたダビデにはそれらの策略は成功しなかったのです。むしろ、失敗に終わったことによって彼らは自分の身に恥を招くことに繋がりました。彼らの悪は彼らの身に降り掛かりあげくに主の怒りによって神に逆らう者はさばきを受けるのです。これが神に逆らい悔い改めない者の結末だと、ダビデは教えています。

しかし、ダビデのように公正なさばきを行う正しい審判者である神に身をゆだね、そして、この方を自分の盾として歩んでいる者には、大きな慰めがあるということも教えています。確かに、私たちはときに有りもしないことで疑いを掛けられたり、不当な扱いを受けることがあるかもしれません。いわれもないことで罵声を浴びること、自分のしていることに正当な評価を受けられないことがあるかもしれません。自分の手に負えないような状況の中で反論することも無視することもできないで心が苦しむこと、そのようなことがあるかもしれません。「どうすればいいのだろう？」と思うこともあるでしょう。ダビデがここで教えていること、それはたとえだれも見ていなかったとしても、だれにも助けを求めることが出来なかったとしても、そんな苦しみにあったとしても、心を見られている主はあなたに起こっているすべてのことをご存じだということです。そして、何よりもこの主が必ず悪や罪に対して正しいさばきを与えてくださる。必ず、主が正しい者には正しい報いを与えてくださるのです。だからこそ、ダビデはこの主にすべてをゆだねていたのです。

私たちも同じように、私たちの心のすべてを知っておられる主にゆだねることができます。ローマ書１２：１９にはこのように記されています。**「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」**と。皆さん、勘違いしてほしくないことは、主は私たちが望むタイミングで方法で復讐されるということではありません。主はご自分が決められたときに、ご自分のやり方をもって復讐されるのです。この公正なさばきを行う正しい審判者にダビデはすべてをゆだねて歩んでいました。

では、私たちはどのように歩むのでしょう？

４．賛美されるべき正しい審判者　　１７節

ダビデは最後にこのように言っています。１７節**「その義にふさわしく、【主】を、私はほめたたえよう。いと高き方、【主】の御名をほめ歌おう。」**、ダビデはここで自分を守り公正なさばきを必ず下してくださる神の義を覚えて神に賛美をささげていました。また、彼はここで**「いと高き方、【主】の御名をほめ歌おう。」**と言っています。この**「いと高き方、」**ということばの意味は「主はこの世界を支配しておられるお方」ということです。要するにダビデは、自分がどれ程理不尽な目にあっていても、どれ程厳しい迫害を受けて苦しんでいても、それさえも主が支配しておられると、そのことを覚えていた彼はこの神に賛美をささげていたのです。

主は性質においても正しく、そして、ご自分の為さるすべてのことにおいて正しいお方だということです。思い返してみれば、自分の愛する兄弟たちに憎まれ、そして、エジプトに奴隷として売り払われたあのヨセフも、主の主権に対してこのように言っていました。創世記５０：１９－２０**「:19 ヨセフは彼らに言った。「恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。:20 あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」**、ヨセフにしても、今回見ているダビデにしても、本来受けるべきではない、受ける必要のない罰を受け不当に扱われたことで大きな苦しみを味わっていました。人間的に考えると、そのような理不尽な扱いを受けると不満を覚えてしまったり、怒りをもってしまったり、絶望を覚えてしまうことがあっても仕方のないことかもしれません。しかし、彼らはどちらも主権者である神が正しいことを必ず成されると、そのことを信じそのことに確信を置いていました。だから、彼らはそのような状況にあっても文句を言うことなく、正しい審判者である神を心から賛美することができたのです。

では皆さん、私たちはこの正しい審判者が受けるべき受けるにふさわしいそのような賛美を、そんな礼拝をささげることができているでしょうか？私たちにとって正しい審判者である神がすべてのことを支配していてくださっている、そして何よりも、この審判者が私たちのことを守っていてくださるという、この事実は大きな喜びをもたらすはずです。それなら、あなたはその喜びにふさわしい感謝を主にささげているでしょうか？それとも、主に対する感謝が薄れ、こうして礼拝することができることも当たり前になってしまっていないでしょうか？今、自分のうちをしっかり見て考えてみてください。

あなたは主の義にふさわしい賛美をささげているでしょうか？正しい審判者であられるお方は、私たちの心を見られるお方でした。私たちの心の隅々まで見られるお方でした。今、あなたの心は天地、この世界のすべてを造り、それを保っておられる聖く罪のない栄光の神がお受けになるにふさわしい心の態度をもっているでしょうか？あなたの心の思いを見て主は「すばらしい！」と言ってくださるでしょうか？それとも、あなたの賛美は聞きたくないと言われるでしょうか？

皆さん、私たちはこの主が義なる方、正しいお方であることを絶対に忘れてはいけません。なぜなら、

罪深い私たちは本来このように神に礼拝をささげること、この神の前に立つことすら出来ない者だったのです。しかし、あわれみ深い神はイエス・キリストをこの世に送り、そして、私たちのために死んでくださったあの十字架の犠牲によって、その血潮によって、私たちの罪をすべて洗い流してくださったのです。だから、今、こうして喜び、神を礼拝することができます。神に賛美をささげることができるのです。

私たちを救ってくださったこの救いは当たり前のものではありません。主を礼拝することができること、それも当たり前のことではありません。かつて、罪ゆえに自分に対して向かっていた神の怒りが、今は私たちを守るものとして、私たちを守る怒りの神として私たちとともにいてくださるのです。正しい義が、神の義がそれらのすべてをもたらしてくださいました。この主の義を私たちはいつも覚えて賛美をすることです。また、義だけでなく、主がすべてのことを支配しておられるお方だと確信し、その主にふさわしい賛美をささげているでしょうか？

確かに、私たちの周りには私たちに理解できないことが起こります。信仰者として歩むときに、私たちは不当な扱いを受けたり苦しみを受けることがあります。また、無実の罪で責められ心が思い悩むこともあるでしょう。しかし、どんなことがあっても、私たちの目にどれだけ理解できない有り得ないことであったとしても、それらのすべては大いなる主の御手の外で起こっていることではありません。すべてのことを支配されている主は、良いときも悪いときも、悲しいときも喜びのときも、すべてにおいて、ご自身の栄光を現そうと計画されているのです。

このお方のうちに今日私たちは身をゆだね守られながら歩んでいくことができるのです。もし、そうなら、私たちの口から出ることばは不安や愚痴でしょうか？それとも、苦しみの中にあっても主に助けを求めながらささげる主への賛美でしょうか？ダビデは正しい審判者がどのようなお方かが分かっていました。だからこそ、その正しい審判者に対して心からの賛美をささげていたのです。私たちはどのような賛美を今ささげているでしょうか？

まとめ

さて、今朝は正しい審判者である神がどのような存在か、どのような特徴をもっておられるのか、そのことを見て来ました。この方は私たちに守りを与えてくださるお方でした。それだけでなく、私たちの心を知っていてくださり、たとえ、有りもしないことで責められることがあったとしても、周りの人があなたのことを訴えたとしても、正しい審判者である主は私たちとともにいて、私たちのすべてをご存じでいてくださる。そして、主の決められたタイミングで必ず正しいさばきを与え正しい報いを与えてくださるお方です。ですから、どうか、ともにこの主の前に、この正しい審判者の前に自分の心を探り、罪があるならそれを悔い改めて聖さを追い求める者として変わり続けていきましょう。そして、この正しい審判者にこそ私たちは心からの礼拝をささげるべきです。心からの賛美を日々実践する者として今週も歩んでいきましょう。